

第 58 回 日本生殖医学会

2013.11.15-16. 兵庫

採卵数と採卵前後のホルモン動態の関係についての検討

医療法人 三慧会 IVF なんばクリニック

伊藤啓二郎 佃笑美 姫野隆雄 大西洋子 井上朋子 中岡義晴 橋本周 森本義晴

【目的】調節卵巣刺激周期において卵胞が十分に成熟し E2 値も上昇した症例に採卵を実施しても予測より少ない数の卵子しか回収できないことが日常診療中で経験されることは稀ではなく、胚移植のキャンセルなどその後の治療に影響を与える場合がある。今回採卵数の少なかった症例群の採卵前後のホルモン値を採卵数の多い群と比較して検討を行ったので報告する。

【方法】2012 年 8 月から 12 月までに調節卵巣刺激周期を施行した症例のうち採卵決定日の E2 値が 1500~3000pg/ml で成熟惹起として HCG を 5000IU 投与した 92 例について採卵数が 8 個以下の A 群 (35 例) と 9 個以上の B 群 (57 例) に分け、採卵決定日の E2 値、採卵日の E2 値、P4 値、HCG 値を比較した。統計解析は t 検定を用い、 $p < 0.05$ を有意差ありとした。

【結果】平均採卵数は A 群: 6.1 ± 1.8 個、B 群: 12.6 ± 3.6 個と B 群が有意に多かった ($p < 0.05$)。採卵決定日の E2 値 (1969.9 ± 337.9 pg/ml v. s. 2101.8 ± 377.9) は差がみられなかった。採卵日の E2 値 (1197.0 ± 469.4 pg/ml v. s. 1151.5 ± 399.5)、hCG 値 (129.2 ± 41.0 mIU/ml v. s. 129.5 ± 31.7) には差がみられなかったが P4 値 (4.27 ± 2.11 ng/ml v. s. 6.68 ± 4.01) では A 群が有意に低値であった ($p < 0.05$)。

【考察】今回の検討では採卵数の少ない群では hCG は十分量が投与されているが顆粒膜細胞の黄体化が不十分であったという結果であった。今後も症例数を増やしてこうした症例に対して hCG 投与量の増量などの個別化した対応が有効であるか検討が必要である。